

子ども用



伝道地便り

2020年 第1期 中央ヨーロッパ支部

第1話 「お父さんのための祈り」	スロバキア
第2話 「1人のバプテスマの力」	チェコ共和国
第3話 「ガタガタ鳴る車輪」	ブルガリア
第4話 「ピザを食べられなかった少年」	イタリア
第5話 「少年の信仰」	スペイン
第6話 「奇跡の土地」	スペイン

ADVENTIST
MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団 伝道局 安息日学校部

伝道地便りの使い方のヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

- 1) 前もって何度か目を通し、自信を持って読む。
- 2) 棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。
- 3) 伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。
- 4) 誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。
- 5) できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。
- 6) 時には、スキット(寸劇)風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」紹介しましょう。

1. お父さんのための祈り

スロバキア



ドミニカ・カボロバ 15歳

ドミニカ・カボロバは、スロバキアにあるロマの人々の居留地（ラクシー）に住んでいます。ある日、セブンスデー・アドベンチスト教会に出席したドミニカは、イエス様のことを早くお父さんに伝えようと急いで家に帰りました。そしてドアを走り抜けてくださいと言うなり、お父さんに、

「私、イエス様を信じてるの！」

と叫びました。

お父さんは向こうへ行ってしまうました。イエス様のことは聞きたくなかったのです。

ドミニカは悲しくなりました。

そのとき、ロバートおじさんが訪ねてきました。お父さんはおじさんの話を聞かないわけにはいきませんでした。おじさんはセブンスデー・アドベンチストでした。

「昔の私がどんなだったか覚えているだろう？」おじさんは言いました。「今はもうあんな生き方はしていないよ。イエス様が助けてくださったからね。私の人生は前よりもずっと良くなったよ」

お父さんは、ロバートおじさんの言っていることは本当だと思いました。そこで、おじさんと一

緒に、近所の家でやっている聖書研究会に行くことにしました。

聖書研究会に行くようになったお父さんは、イエス様を信じました。タバコとお酒、かけ事も止めました。そして、12歳のドミニカと一緒にバプテスマを受けました。

ドミニカは生まれ変わったお父さんが好きでした。2人は朝と夜に一緒にお祈りをし、聖書を読みました。そして安息日には一緒に教会に行きました。

ある日、お父さんは、教会の人と言い争いをしてしまいました。そしてその次の安息日、お父さんは教会に行かないと言い出しました。タバコやお酒、そしてかけ事もまたやるようになりました。

ドミニカはとても悲しい気持ちでした。そしてお父さんが神様のところに戻るようにとお祈りしました。

「神様、どうかお父さんにタバコをやめさせてください。そしてまた一緒に教会に行けるようにしてください」

ドミニカは毎日お祈りしました。聖書を読むたびに、その聖句をお父さんにも教えてあげました。お父さんは考え込むような様子で聞いていました。

何か月かが過ぎました。お父さんはかけ事を止めました。そしてお酒も止めました。ある安息日、お父さんは教会に行く支度をしていたドミニカに言いました。「ちょっと待って。お父さんも一緒に行くよ」

ドミニカは跳びあがるほど嬉しくなりました。神様がお祈りを聞いてくださったのです。

それからドミニカはお父さんのためにお祈りしました。聖句を教えることも続けました。ある日、ドミニカはコリント第一の手紙 13 章を読みました。そして、お父さんにもそこを読んでもらおうと、聖書を手渡しました。

お父さんが読みながら涙を流しているのを見て、

ドミニカはびっくりしました。お父さんは、身体
の大きな、強い人で、今まで泣いているところな
んて見たことがありませんでした。お父さんは「そ
れゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつ
までも残る。その中で最も大いなるものは、愛で
ある」と読みました。

そしてドミニカをぎゅっと抱きしめました。

「ドミニカ、お父さんが神様のところに戻るの
を助けてくれてありがとう」

今、お父さんは時々教会に行きます。タバコは
まだ吸っていますが、神様にもう一度心をすべて
捧げられるように一生懸命頑張っています。近所
のアドベンチストの人が定期的に訪ねてきて、お
父さんに、「あなたの子どもはドミニカだけではなく、
ほかに5人の弟や妹がいることを忘れないで
くださいね」と言っています。

「神様のいる人生のほうが、いない人生よりも
良いですよ？」とその人は言っています。

お母さんはアドベンチストではありませんが、
お父さんが神様のところに戻ることを望んでいる
ので、「あなたは教会に行っていたときの方が、良
い人だったわ」とお父さんに言いました。

ドミニカは毎日、お父さんとお母さんが心をす
べて神様に捧げられるようにお祈りしています。

「神様が私たちを助けてくださっていることが
わかって、神様にとっても感謝しています」とドミ
ニカは言っています。

今期の13回献金の一部は、スロバキアのラク
シーにあるドミニカの教会で、弱い立場にある子
どもたちのプログラムのために使われます。皆様
の惜しみない献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

・地図でスロバキアのケズマロックを探してくだ
さい。ラクシーはその街はずれにあります。

・youtube でドミニカを見ることができます。

bit.ly/Dominika-Gaborova

・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) か ADAMS デー
タバンク (bit.ly/Praying-for-Father) で、写真をダ
ウンロードしてください。

・13回献金のプロジェクトの写真をダウンロード
してください。 bit.ly/eud-2020-projects

豆知識

- ・スロバキアで一番人気のあるスポーツ
は、アイスホッケーとサッカーです。

2. 1人のバプテスマの力 チェコ共和国



ヤナ・ストイカ 14歳

1人のバプテスマの力とは何でしょうか。ヤナ・ストイカは、小さいころにバプテスマを受けたいと思いましたが、お父さんとお母さんはまだ小さすぎると言いました。

13歳になったとき、ヤナは、それまで忘れていた、バプテスマを受けたいという気持ちを突然思い出しました。とても強い、抑えきれない思いがあふれてきました。

「私、バプテスマを受けたい！」とヤナは思いました。

そしてヤナは、家族と一緒に通っているチェコ共和国の首都プラハにあるロシア語のセブンスデー・アドベンチスト教会で、6か月のバプテスマクラスを受け始めました。そして親せきや友達に、心をイエス様にささげるという計画を、わくわくしながら伝えました。

ウクライナに住んでいる21歳のお姉さんのオルガがそのことを聞き、「私もバプテスマを受けたいわ！」と言いました。オルガはウクライナでバプテスマクラスを受け始め、ヤナと同じ安息日にバプテスマを受けられるよう、プラハに帰る計画

を立てました。

姉のオルガもバプテスマを受けると聞いてヤナはわくわくしました。1人のバプテスマが2人になったのです。

バプテスマの日が近づくと、ヤナは親せきや友達にも式に来てもらおうと教会に誘いました。そして、彼女の通っているプラハで唯一のアドベンチスト学校の中学2年生のクラスメイト17人にも、

「バプテスマを受けるのが本当に楽しみな。盛大なお祝いだから、来てもらえたらうれしいわ。」と言って招待しました。

校長先生は、クラスメイトと話しているヤナの表情に驚きました。喜びで輝いていたからです。生徒たちの多くは他教派のクリスチャンだったり、教会にまったく行っていない人たちでした。

ついに、待ちに待った2018年9月22日の安息日がやってきました。親せきと友達が教会を埋め尽くしました。ヤナはとても幸せでした。水から上がったとき、夢がやっと叶ったということを実感しました。

牧師先生が会衆に、「次の機会にバプテスマを受けたい人はいませんか？」と聞きました。するとヤナの妹のエスターが椅子から跳びあがって前に走り出しました。10代の女の子が2人それに続きました。

ヤナはわくわくしました。1人のバプテスマが、5人のバプテスマになるのです。

ヤナの招待を受けて、クラスメイトが8人来ていました。その後しばらくして、そのうちの女の子2人と男の子1人が、バプテスマを受ける決心をしました。

ヤナはわくわくしました。これで、1人のバプテスマが8人のバプテスマになるのです。

でもこれで終わりではありませんでした。

ウクライナの大学で勉強していたヤナのもう1

人のお姉さんのダイアナもヤナのバプテスマに立ち会うためにプラハに戻ってきていました。バプテスマの後にダイアナは、「ねえ、私もバプテスマを受けたいと思っていたの」と言いました。

1か月後、ダイアナもウクライナでバプテスマを受けました。

1人のバプテスマの力とは何でしょうか。

聖霊が、バプテスマを受けたいというヤナの決心を用いて、8人の人の心に触れたのです。1人のバプテスマが9人のバプテスマになったのです。

「私がバプテスマを受けたら、他の人たちもバプテスマを受ける決心をしました。神様は素晴らしいです！」とヤナは言っています。

今期の13回献金の一部は、チェコ共和国の、非行や虐待の危険にさらされている子どもたちを助けるプログラムのために使われます。

〈お話のヒント〉

- ・地図でチェコ共和国のプラハを探してください。
- ・子どもたちに、バプテスマを受けることを考えたことがあるかどうか聞いてください。そして、バプテスマを受ける前でも、日ごとに心をイエス様に捧げようという願いを彼らの中に育ててください。両親にバプテスマについて話してみるよう、子どもたちに提案できそうだったらしてみてください。
- ・子どものバプテスマについて、アドベンチスト世界教会の児童伝道のウェブサイトを読んでみましょう。 children.adventist.org/children-and-baptism
- ・youtube でヤナと妹のエスターを見ることができます。 bit.ly/Yana-Stoyka
- ・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) か ADAMS データバンク (bit.ly/power-of-baptism) で、写真をダウンロードしてください。
- ・13回献金のプロジェクトの写真をダウンロードしてください。 bit.ly/eud-2020-projects

豆知識

- ・チェコは避雷針、スクリュープロペラ、コンパス、角砂糖、グラビア印刷、アークランプ、セムテックスというプラスチック爆薬、ソフトコンタクトレンズなどが発明された国です。

3. ガタガタ鳴る車輪

ブルガリア



ボリスラフ・ミトフ 69歳

アドベンチストの青年が3人、車に乗り込んで、ブルガリア南西部の町、ブラゴエヴグラトに向けて出発しました。

そのころ、ブルガリアは共産主義の国で、厳しい法律がありました。ブラゴエヴグラトでは、5人のロマの人々が神様の言葉を聞きたいと待っていましたが、アドベンチストの牧師はそこに行くことが許されていませんでした。そこで35歳のロマのアドベンチスト、ボリスラフ・ミトフが、友達を2人誘って、キュステンディルから70キロの旅に出かけることにしたのです。

半分くらい来たところで、車が突然大きな音をたて、ガタガタ揺れだしました。ボリスラフは車を止め、ほかの2人と一緒に、その音がどこから出ているのか見ようとしました。運転席側の前の車輪のあたりが故障しているようでした。

「これ以上は進めないよ。車をここで修理しな

いと。」と友達の1人が言いました。

その車はボリスラフのものであったので、彼もまた、このまま行くかどうか迷ってしまいました。

けれどももう1人の友達は強い信仰を持っていて、こう言いました。「行こうよ。神様が一緒にいてくださるから」。

ボリスラフと迷っている友達は気が進みませんでしたが、もう1人の友達が励まし続けたのでボリスラフはエンジンをかけました。

ガタン、ガタン、ガタン、ガタン、車は大きな音をたて激しく揺れました。

ボリスラフはスピードをゆるめました。ガタン、ガタン、ガタン、ガタン、音はさらに大きくなったようでした。

「音が聞こえなくなるように、音楽をかけようよ」友達が言いました。

「それより、歌を歌おうよ」もう1人が言いました。

そこでみんなは讃美歌を歌うことにしました。すると驚くようなことが起こりました。ガタン、ガタンという大きな音が止まったのです。激しい揺れも収まりました。車は静かになめらかに走り出しました。3人は目的地までずっと歌っていききました。

人々は、聖書を早く学びたいと3人が来るのをわくわくしながら待っていました。ボリスラフはこの旅がとても重要なものだったということ、そしてサタンがそれを止めようとしていたことを理解しました。

訪問が終わると、信仰深い友達は言いました。

「車は修理に出さないで、また歌って帰ろうよ」

ほかの2人は、そんなことは子どもじみた考えだと思いましたが、もう真夜中だったのでその提案を受け入れました。他にできることもなかったからです。

ガタンガタン、ガタン、ガタン、ガタン、車は音を立てて揺れました。けれども3人が賛美歌を歌い始めると、うるさい音も揺れも収まりました。

しばらくすると、みんなは疲れて歌を止めてしまいました。少しの間、車は静かに走りました。

ガタン、ガタン、ガタン、ガタン！

みんなは口を開いて歌いました。騒音と揺れはまた収まりました。

この車を修理に出したとき、ボリスラフはこの奇跡の大きさを知りました。修理屋さんは車を見て信じられない様子でした。「この車がキュステンディルまで行って帰ってこられるなんて、あり得ませんよ。このようにホイールベアリング（車輪の軸受け）が壊れると、車輪は1分か2分で動かなくなるものです」

この小さなロマのグループから、セブンスデー・アドベンチスト教会がブラゴエヴグラトに設立されました。この教会は今日にいたるまで成長し続けています。ボリスラフ自身もその後牧師になりました。

彼は現在69歳で、牧師を引退しています。けれどもあのガタンガタンという車輪のことは今でも覚えています。この出来事はヤコブ4章7節の聖句を思い起こさせます。「ですから、神に従い、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります」（聖書協会共同訳）ボリスラフはこう言っています。「私がここから学んだ教訓は、私たちは悪魔に立ち向かわなければならないということです。そうすれば悪魔が私たちから逃げてゆきます」

今期の13回献金の一部は、ブルガリアの首都ソフィアにある、ソフィア西セブンスデー・アドベンチスト教会に新しい建物を作るために使われます。あなたの心からの献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

・地図でブルガリアのブラゴエヴグラトを探してください。キュステンディルからブラゴエヴグラトのルートを示してください。

・youtube でボリスラフを見ることができます。

bit.ly/Borislav-Mitov

・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) か ADAMS データバンク (bit.ly/Rattling-Wheel) で、写真をダウンロードしてください。

・13回献金のプロジェクトの写真をダウンロードしてください。 bit.ly/eud-2020-projects

豆知識

・ブルガリアでは、毎年3月1日のババマルタ（ババはおばあさん、マルタは3月の意）の日に、マルテニツァという小さな飾り物を交換します。これは白い毛糸と赤い毛糸で出来ていて、普通は人形の形をしたものがペアになっています。白いものは男の人形のピショで、赤いものは女の人形のペンダといいます。マルテニツァをもらった人は、それをババマルタの日から、冬の終わりを象徴するコウノトリかつバメ、または木に花が咲くのを見るまで（または3月の下旬になるまで）身に着けます。

4. ピザを食べられなかった少年 イタリア



トーマス・ボルドリーニ 7歳

トーマスが初めてチーズを食べたのは1歳のときでした。お母さんが小さく切ったものを食べると、彼は突然息ができなくなりました。

お母さんはトーマスを急いで病院に連れていき、お医者さんのおかげで命は助かりました。でもお医者さんは、トーマスには牛乳に対して重いアレルギーがあると言いました。

これはトーマスの住んでいるイタリアでは大問題です。イタリア人は牛乳が大好きです。ただ飲むだけではなく、モッツァレラチーズの乗ったピザや、パルメザンチーズをかけたスパゲッティも大好きです。ジェラートやケーキも大好きですが、これらにも牛乳が使われています。でもトーマスはどれも食べることはできません。食べると死んでしまうのです。

このアレルギーが家族の生活を変えました。お友達の誕生日パーティーに呼ばれると、お母さんは特別なケーキを作らなければなりませんでした。ジェラート屋さんでは、トーマスはグラニタしか頼めませんでした。グラニタとは、氷とレモン汁で作られたシチリアのデザートです。お母さんは、

教会の人たちにトーマスのアレルギーについて伝えました。するとみんなは、土曜の夜の教会のピザ・パーティーのピザを変えました。ピザは出ましたが、生地とトマトソースだけで、チーズは乗せないようにしたのです。

お母さんは、トーマスがこのイタリアで、アレルギーを持ちながらどうやって生きていったらいいのかと思いました。トーマス自身も、どうやって生きていったらいいのかと思いました。毎晩家庭礼拝のときに、彼は助けてくださいとお祈りしました。

「イエス様、僕はほかの子と同じものが食べられるようになりたいです」

お母さんもお祈りしました。そしてたくさんのお医者さんに連絡を取って、助けてほしいと相談しました。ついに、イスラエルから来たお医者さんが、何かできるかもしれないと言ってくれました。新しい治療法を試している先生でした。

新しい治療を受け始めて3か月が過ぎました。トーマスとお母さんはずっとお祈りしていました。そしてある日、そのイスラエルから来た先生が、治療は終わりました、トーマスは何でも好きなものを食べていい、と言いました。

お母さんは本当かしらと思いました。お医者さんは、診察室にケーキを持ってきてください、一緒に食べましょうと提案しました。

お母さんは、普通のケーキではなく、レモンケーキを焼きました。小麦粉を500グラムも入れて、牛乳はほんの少し、30グラムだけ入れました。次の日、お母さんはそのケーキを小さく小さく切ってトーマスに渡しました。

お母さんはトーマスがアレルギーを起こすかどうか、注意深く見守りました。何も起こりませんでした。

お母さんはトーマスを別のお医者さんのところに連れて行きました。そのお医者さんは検査をし

て、まだアレルギーがあると言いました。お母さんがレモンケーキは大丈夫だったという話をすると、お医者さんは、では実験をしてみましょうと言いました。先生は牛乳をグラスに半分、トーマスに渡して、これを病院の中で、7時間かけて少しずつ飲みなさいと言いました。そして、

「もし何かあっても、命を助ける薬はちゃんと用意してあります」と言いました。

トーマスは7時間かけてその牛乳をゆっくりと飲みました。何も起こりませんでした。

「君は完全に治っているよ」とお医者さんは驚いて言いました。「なんでも食べて大丈夫だよ。乳製品もね。これは奇跡だ！」

次の朝、トーマスは生まれて初めて、朝食に牛乳を飲みました。

安息日に教会で、トーマスとお母さんは神様がお祈りにこたえてくださったという大ニュースを発表しました。教会の人たちは大喜びでした。涙を流す人もいました。その夜、教会は盛大なピザ・パーティーを開きました。トーマスを含めて全員が、チーズの乗ったピザを食べました。2月で外はとても寒かったのですが、食後にはジェラートも食べました。

今、トーマスは7歳で、神様への感謝にあふれています。毎晩の家庭礼拝で、トーマスは神様のすばらしさを感謝しています。彼はもう自分の健康を心配していません。そして今は別のことについてお願いしています。

「神様、僕が持っているものすべてに、そしてアレルギーを治してくださったことに感謝しています。今夜の願いは、良い夢が見られますように、でなければ、全然夢を見ませんように、というものだけです」

神様が乳製品アレルギーを治してくださったこと、悪い夢からも守ってくださることをトーマスは知っています。

3年前、皆さんの13回献金のおかげで、トーマスの住むラグーザに新しい教会を建てることができました。皆さんの献金のおかげで、トーマスと教会のみんなが、賃貸の建物から自分たちの教会

の建物に引っ越して、安息日ごとに神様について学んだり、ピザ・パーティーを楽しんだりできるようになったことを感謝しています。

〈お話のヒント〉

・地図でイタリアのラグーザを探してください。イタリア南部、シチリア島の丘の上に広がる地域です。

・お母さんのアレクサンドラ・コバトは、神様が、トーマスのアレルギーを治したと確信しています。二人目のお医者さんが、検査の結果トーマスはまだ乳製品アレルギーだと言ったからです。それからグラス半分の牛乳を飲ませる実験をして、治っていることがわかりました。

・youtube でトーマスを見ることができます。

bit.ly/Thomas-Boldrini

・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) か ADAMS データバンク (bit.ly/Life-Without-Pizza) で、写真をダウンロードしてください。

・13回献金のプロジェクトの写真をダウンロードしてください。 bit.ly/eud-2020-projects

5. 少年の信仰

スペイン



ダビド・ルーカス・ドレーテ・ドルガ 10歳

スペインの首都マドリードに住む9歳のダビドは、よく質問をしました。「人間はどこから来たの?」「僕たちはどうしてここにいるの? お父さんは神様が僕たちを造ったって言うけど、先生はサルから進化したって言うてるよ!」

お父さんはダビドに、神様が人間をお造りになったと教えていました。けれどもダビドは、自分の通う公立の学校ではそのように教わっていませんでした。

お父さんがサグント・アドベンチスト・カレッジで牧師になるための勉強をすることになったので、ダビドの家族はマドリードからサグントに引っ越しました。サグント・アドベンチスト・カレッジのキャンパスには小学校があるので、ここならダビドは、天地創造について聖書から学ぶことができます。

けれども、学校が始まる1か月前に、4年生のクラスはいっぱい、ダビドは転入できないことがわかりました。多くの親たちが自分の子どもを4年生に入れてもらおうと順番待ちをされていて、ダビドの順番はずっと後でした。

お父さんは「お祈りしよう」と言いました。

夜の家庭礼拝でお父さん、お母さん、そしてダビドは、このアドベンチストの学校に入ることができるようにと祈りました。毎日、毎日、1か月間お祈りしました。でもある日、校長先生がお父さんに言いました。「すみません。4年生はもういっぱいなので、ダビドは入れません」

仕方なく、ダビドは公立の学校に入りました。

でもダビドの家族はあきらめませんでした。お父さん、お母さん、そしてダビドは、アドベンチストの学校に入れるようお祈りを続けました。ひと月が過ぎ、ふた月が過ぎました。

お母さんは学校についてお祈りすることを止めました。お父さんも止めました。

「神様は、公立の学校でダビドのためのご計画があるに違いないよ。クラスでよい証をすることが必要なかもしれないね」

でもダビドはお祈りを続けました。毎晩の礼拝で、ダビドは神様にお父さんとお母さんのことを感謝して、最後にいつも「神様、もし僕をアドベンチストの学校に入れたいと思われるのであれば、どうか4年生のクラスに空きができますように」とお祈りしました。

お父さんは心配でした。ダビドにがっかりしてほしくなかったからです。そして「神様をせかせかせはだめだよ。神様はいつも私たちが望むようなやり方で答えてくださるわけじゃないからね」と言いました。

でもダビドはお祈りを続けました。学校が始まって4か経ったとき、お父さんは4年生が一人、アドベンチストの学校から転校したことを知りました。お父さんは急いで校長室に行き、ダビドが入れるかどうかを聞きました。

「歓迎しますよ」と校長先生は言いました。

「でも喜ぶのはまだ早いです。公立の学校からアドベンチストの学校に移るには、市の教育委員会

の許可がいきます。この時期だと、その許可をもらうのはとても難しいですよ」

お父さんとお母さんはやってみることにしました。市の教育委員会のところに行くとき、二人には小さな信仰しかありませんでしたが、40分後、転校を許可する書類を手にしていました。ダビドはアドベンチストの学校に通えるのです！

お父さんとお母さんは信じられませんでした。教育委員会のオフィスを出ると、二人はお祈りをしました。「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか」お父さんは詩編8篇4節（口語訳）のダビデのお祈りを引用して祈りました。

「あなたは私たちの小さな信仰にさえ答えて、これらすべてのことをしてくださいました。あなたはすべてのものをくださるお方です」

お父さんとお母さんが帰ったとき、ダビドは家にいました。「これを見てごらん」お父さんは転校を許可する紙を見せながら言いました。「神様はこんなに力のあるお方なんだよ。こうやってお祈りに答えてくださったんだよ」

ダビドは顔中ニコニコになり、嬉しくて家の中を跳び回りました。

「もう一度お祈りしよう。神様にお礼を言わない」とお父さんが言いました。

ダビドは頭をたれて祈りました。

「イエス様、僕のお祈りに答えてくださってありがとうございます。学校で楽しく過ごせるように守ってください」

そして目を開けてお父さんに言いました。

「お父さん、一緒にサッカーやらない？」

ダビドは今、お父さんが牧師になるために勉強しているサグント・アドベンチスト・カレッジのすぐ近くにある学校に通っています。今期の13回献金の一部は、この神学科の新しい建物を建てるために使われます。そこには小学生のための、天地創造に関する博物館も作られます。ダビドを初め子どもたちが神様の創造についてさらに学ぶための、惜しみない献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

・地図でスペインのマドリッドとサグントを探してください。

・お父さんは、ダビドは公立の学校でよい証ができるのではと考えました。子どもたちに、通っているのが公立校であれ三育校であれ、どうやったらクラスメイトにより証ができるかを聞いてみてください。

・子どもたちに、自分たちが両親のよい手本にもなれるということを伝えてください。お父さんのローレンティウ・ステファン・ドルガは、こう言っています。「私はとても大切なことを学びました。私が信じることを止めてしまってお祈りを止めても、息子は祈り続けました。私が彼の手本になるのではなく、彼が私の手本になりました」

・『大人用伝道地便り』（英語版は

<https://www.adventistmission.org/same-dream-at-night-for-10-years>)で、ダビドのお父さんについての記事を読んでみてください。

・youtube でダビドを見ることができます。

bit.ly/David-Druga

・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) か ADAMS データバンク (bit.ly/Faith-of-Boy)で、写真をダウンロードしてください。

・13回献金のプロジェクトの写真をダウンロードしてください。 bit.ly/eud-2020-projects

6. 奇跡の土地

スペイン



ホセ・ロペス 90歳

校長先生に大切な仕事が任されました。セブンステー・アドベンチスト教会は、スペインに建てる新しい学校のための土地を探していて、それを見つけるのが校長先生の役目でした。

でもどこを探したら良いのでしょうか。

校長先生のホセ・ロペスは、まずスペインの首都マドリードとその周辺で探してみることにしました。よい土地はありましたが、予算の350万ペセタ（日本円で1800万円ほど）を大幅に越える金額でした。

ホセは次にスペイン第二の大都市、バルセロナとその周辺を見ました。ここもよい土地でしたが、やはり予算オーバーでした。

次にスペイン第三の都市、バレンシアに行きました。ここはホセの家の近くでした。なぜなら彼は、バレンシアの教会の建物で行っているセブンステー・アドベンチストの学校の校長だったからです。この学校の建物は小さすぎました。多くの生徒がここで牧師になるための勉強をしていて、大きな建物が必要でした。

ホセはバレンシアを見て回り、不動産屋さん

どこか良いところはないか聞きました。不動産屋さん、バレンシアの土地は予算よりもずっと高いと言いました。

ある日、不動産さんは、バレンシアの北30キロのところにある土地を見てみてはどうかと提案してくれました。

ホセは田舎の丘陵地帯にあるその土地が気に入りました。そこには素晴らしい緑の松の森があり、ハイキングやキャンプにぴったりでした。一番素晴らしいのは、その土地の中心に、放置されたキャロブとオリーブの林があったことです。ホセは、こここそが学校を建てるのに理想的な場所だと提案してくれました。

不動産さんも、ホセがこの場所を気に入ったのがわかり、こう言いました。

「ここは素晴らしい場所です。でも高いですよ。」

この土地の持ち主は80代の老婦人でしたが、450万ペセタの値段をこの土地に付けていました。予算より100万ペセタ（約500万円）も高いです。

ホセはこの持ち主に会いました。

「この土地が気に入りました。でも高すぎます。私たちには350万ペセタしかないのです。」

老婦人は少し考えました。

「今日の午後娘たちと話してみます。亡くなった夫が、この土地の売買に関してある条件を付けているのですよ。」

そしてこの老婦人は、50代の娘さん二人と、ひそかに話しました。娘さんたちも、お父さんが亡くなる前に付けた土地を売るときの条件を覚えていました。

「お父さんは学校を作るのであれば土地を売ってはいけないうって言ってたわよね」と娘さんは言いました。

老婦人はホセの方を見て、

「この土地を何に使うのですか」

と訊きました。

「私たちは学校を建てようとしているのです」とホセは答えました。

老婦人は驚いた様子でした。そんな答えが返ってくるとは思っていなかったようです。彼女は何年もこの土地を売ろうとしてきたのですが、誰もここに学校を建てようとしなかったので売れなかったのです。

「いくらお持ちとおっしゃいましたか」と彼女は聞きました。

「350万ペセタです」

老婦人は少し考えました。

「娘たちは450万で売りたいと思っています。でも私はとても年を取ったし、夫の願いが叶うのを見ずには死ねません。あなたが学校を建てたいのなら、娘たちともう一度話してみます」

老婦人は娘さんたちと話し合い、もう一度ホセに会いました。ホセが本当に学校を建てようとしているのかどうか、疑っているようでした。

「本当に学校を建てようとしているのかどうか、確かめたいと思います。土地350万でお譲りします。でも、本当に学校を開校するという契約にサインしてください」

ホセは自分の耳を信じることができず、驚いてひっくり返りそうになりました。土地の持ち主が、元の値段からこんなに値引きしてくれるとは、信じられない気持ちでした。

老婦人は話し続けました。

「夫は教師でした。そしてこの土地に学校を建てるのが彼の願いであり夢でもありました。この土地は何年もの間使われずにきましたが、こうして夫の願いをかなえることができたので、私は心安らかに死ぬことができます」

ホセはその時、神様がこの土地を、アドベンチストの教会がまだ探し始めてもいないころから選んでいてくださったことを知りました。

その土地を購入して3年後の1974年に、サグント・アドベンチスト・カレッジが開校しました。現在キャンパス内の小学校、高校、音楽学校、未来の牧師のための神学校で、合わせて700名が学んでいます。

ホセ・ロペス博士は今90歳で、サグント・アド

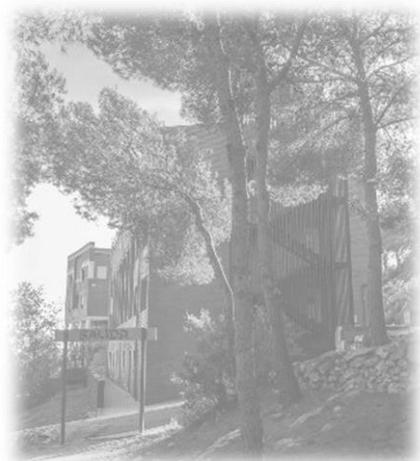
ベンチスト・カレッジの近くの老人ホームに住んでいます。あの老婦人が学校のために土地を売ってくれると言った時のことを思い出すと気持ちを高ぶらせ、「あれは奇跡でした」と言いました。

現在、サグント・アドベンチスト・カレッジは学生であふれかえっていて、神学科には新しい建物が必要です。今期の13回献金の一部はその建物を建てるために使われます。

サグント・アドベンチスト・カレッジを助けるための皆さんの献金に感謝します。ブルガリア、ドイツ、チェコ共和国、スロバキアにおけるその他の大切なプロジェクトのことも覚えてくださいますようお願いいたします。サグント・アドベンチスト・カレッジとその他のプロジェクトのためにお祈りしましょう。

〈お話のヒント〉

・両親に安息日学校のプログラムがあるということを知らせる紙を子どもたちに持ち帰らせてください。子どもたちに、13回献金を3月28日に持ってくるようにと伝えます。伝道地への献金は、神様の言葉を世界中に広めるための贈り物で、今期の13回献金の四分の一は中央ヨーロッパ支部の4つのプロジェクトに対して直接送られるということ伝えてください。そのプロジェクトについては『安息日学校聖書研究ガイド』に載っています。



1981年の13回献金によって建てられたサグント・アドベンチスト・カレッジの女子寮の外観。今期の13回献金は、神学科の新しい建物を建てるために使われます。